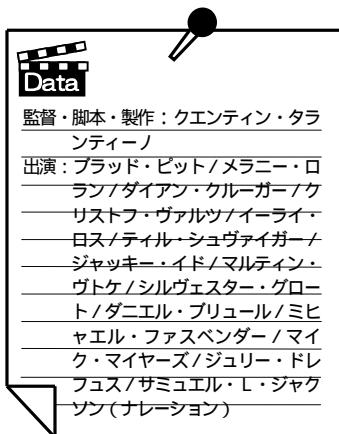




みどころ

ヒトラーをテーマとした最高傑作はチャップリンの『独裁者』(40年)だが、タランティーノ監督の本作はそれとは違う意味での大傑作。こりゃ面白い! 主役のブラッド・ピット以上に、ユダヤ・ハンターの異名をとるナチス将校の存在感が圧巻。そして、2人の美女の役割にも注目! 映画のフィルムの可燃性は? そんな専門知識を学びつつ、異色のエンタメ巨編を堪能したい。

■メチャ面白い! こりゃタランティーノ監督の最高傑作! ■

ヒトラーやナチス・ドイツを描いた名作は多く、最近の話題作は『ワルキューレ』(08年)。またホロコーストを描いた名作も多く、近時の『ミーシャ / ホロコーストと白い狼』(07年)や『縞模様のパジャマの少年』(08年)は涙を誘うものだった。私の独断と偏見によれば、ヒトラーをテーマとした最高傑作はチャップリンの『独裁者』(40年)だが、クエンティン・タランティーノ監督の最新作『イングルリアス・バスターズ』はそれとは全く違う視点からの大傑作。

本作は2009年8月21日から23日の全米公開3日間で『キル・ビルVol.1』(03年)、『キル・ビルVol.2』(04年)のオープニング記録を塗り替える3760万ドル(約35億6000万円)で初登場1位を記録したらしい。また『キネマ旬報』11月上旬号によると、「興行区分では秋に入った9月12日に売り上げ1億ドルを突破」と書かれている。

大阪では9月8日から数回の試写会が始まっていたのに、なかなか時間的都合がつかなかったところ、そんなタランティーノ監督の最新作を本日はじめて鑑賞。メチャ面白い!

こりゃタランティーノ監督の最高傑作！

■□■見どころ満載 その１ ランダ大佐に注目！■□■

邦題の『イングロリアス・バスターズ』は原題『INGLOURIOUS BASTARDS』をそのままカタカナ表記しただけだが、これを理解できる日本人はHow many?日本人の平均的英語能力では、これを「名誉なき野郎ども」と訳せる人は少ないのでは。

それはともかく、そんなタイトルがつけられたのは、アメリカの特殊部隊イングロリアス・バスターズを率いるブラッド・ピット演じるアルド・レイン中尉が本作の主役とされているからだ。しかし私の目には、ユダヤ・ハンターと称されるナチス・ドイツのランダ大佐（クリストフ・ヴァルツ）の圧倒的存在感が印象的。２時間３２分の本作は第１章から第４章までひとつずつのストーリーを完結させながら、最終の第５章であっと驚く怒濤の結末へと導いていくが、ランダ大佐とアルド中尉は出番においてもほとんど同じ。つまり第１章の主役はアルド中尉で、第２章の主役はランダ大佐。そして第５章でも、ランダ大佐とアルド中尉はほぼ同等に張り合う形で対決することに。

本年８月３日から裁判員裁判が始まったため、近時は弁護士や検察官の弁論能力、プレゼン能力が注目されているが、第１章におけるランダ大佐のたくみな話術は、依頼者の本心を探り出さなければならない弁護士はもとより、被疑者から自白を引き出す能力が求められる検察官にとっても大いに勉強になるはず。本作は見どころ満載だが、そんな意味で私はまずランダ大佐に注目。

■□■見どころ満載 その２ この女優に注目！■□■

本作はタランティーノ監督らしく（？）人間の頭の皮をはぐシーンや、バットで撲殺するシーンなど残忍なシーンも目立つが、女優をきれいに見せるのに長けた（？）タランティーノ監督らしく、本作では２人の美人女優が大きな存在感を見せる。その１人は第１章のラストに、ショシャナとしてきたない格好でほんの少しだけ登場し、第３章以降は若き映画館主ミミューとして登場するメラニー・ロラン。

ナチス・ドイツのアドルフ・ヒトラー総統（マルティン・ヴトケ）が映画を活用したことで、また宣伝相のゲッベルス（シルヴェスター・グロート）がその先頭に立ったことはよく知られている。そのゲッベルスの指揮下で製作されたのが、２５０人の連合軍を殺したナチス・ドイツの英雄ツォラー（ダニエル・ブリュール）主演の映画『国民の誇り』だが、さてこれをどんな形で上映？そのプレミア上映にヒトラー自身が参加するかどうかはともかく、ゲッベルス以下のナチス幹部が参加することはまちがいない。しかして、第３～５章ではミミューに近づく若き兵士ツォラーの希望によって、ミミューの劇場でプレミア上映が行われる姿が描かれる。第１章でランダ大佐によって家族全員を殺されたショシャナ

が、今はミミューと称して生き延びているが、ナチスへの復讐の鬼になっていたのは当然。そして皮肉にもそんなミミューの映画館で『国民の誇り』が上映され、多数のナチスの幹部が参加する。こりゃ千載一遇のナチス撃滅のチャンス。ミミューがそう捉えたのは当然だ。しかし、第3～5章までミミューがキーウーマンとしての役割を果たすから、この美少女に注目。

■□■見どころ満載 その3 あの女優にも注目！ ■□■

本作にはもう1人注目すべき女優が登場する。それはドイツ人の人気女優ブリジット・フォン・ハマーシュマルクを演ずるダイアン・クルーガーだ。ナチスの中には必ずしもヒトラーに忠誠を誓う者だけではなく、反ナチス、打倒ヒトラーを狙う分子がいたことは『ワルキューレ』でも明らかだが、まさかドイツ人の人気女優が英国の二重スパイになっているとは？

アメリカの特殊部隊「イングリシアス・バスターズ」がタイトルだが、第4章には『国民の誇り』のプレミア上映の情報を受けたイギリス軍が、ナチスもろとも映画館を爆破するという極秘計画実行の姿が描かれる。その中心人物がイギリスから派遣される元映画評論家のアーチャー・ヒコックス中尉（ミヒャエル・ファスベンダー）であり、ドイツでヒコックス中尉と合流する二重スパイの女優ハマーシュマルク。第4章のメイン舞台は田舎のバー。普段はナチスのいないそのバーでヒコックス中尉やハマーシュマルクは打ち合わせをする予定だったが、その日に限ってあいにく子供が生まれたドイツ兵とそれを祝う仲間たちが騒いでいたり、ナチス将校が一人飲んだりしていたから状況は最悪。

そんな第4章の壮絶な展開は観てのお楽しみだが、そこでのポイントはシンデレラの残したガラスの靴ならぬ、ハマーシュマルクの残した片足だけのハイヒール。現場を訪れたランダ大佐は決してハイヒールマニアではないだろうが、この残された魅力的なハイヒールから一体どんな推理を？

■□■スパイと見抜くには？ ■□■

日本人は一般的に語学が苦手だが、ヨーロッパ人はそうでもない。それは島国の日本に対しヨーロッパは地続きであるうえ、過去2000年以上にわたって戦争をくり返してきた結果、民族間の交流が盛んなため？ ちなみに『マイ・フェア・レディ』（64年）に登場した音声学者ヒギンズ教授は下層の人々の訛りを聞き分ける他、オウムの声まで聞き分けることができるほど？

それはともかく、第2次世界大戦当時ドイツ、フランス、オランダ、イタリア等にイギリスを加えた対立国間でスパイが暗躍していたのは当然だが、彼らが絶対に備えておかなければならない能力の1つが語学。アルド中尉のように暴力で任務を遂行する人間は通訳がいれば十分だが、イギリス人がナチス・ドイツ軍に化けるにはキレイなドイツ語をしゃ

べることが不可欠。ちなみにユダヤ人のショシャナが映画館主となっているのはドイツ占領下にあるフランスだから、叔父、叔母から劇場を譲り受けたと説明しているミミューだって、キレイなフランス語をしゃべることが大前提。

私はここでなぜそんなことを書いているの？それは、誰がスパイだと見抜くのは極めて知的な作業だが、そこでは語学が大きなウェイトを占めていることを言いたいため。ちなみに1867（慶応3）年に近江屋で坂本龍馬と中岡慎太郎を襲い暗殺した人物は未だに特定されていないが、「こなくそ」という伊予の方言を吐いたため、伊予出身の新撰組隊士原田だという節も有力？二重スパイの人気女優ハマーシュマルクはドイツ人だからドイツ語をしゃべれるのは当たり前だが、イギリス人のヒコックス中尉がいくらドイツ映画に詳しくドイツ語に堪能でも、ネイティブでなければどこかに変な訛りが？

他方、近時中国人との交流が深まっている私が面白いと思ったのは、数字を指折り数える時の指の折り方が日本人と中国人とでは全然違うこと。もしあなたが日本人の指の折り方がユニバーサル・スタンダードだと思ったら、それは大まちがいだ。すると、スパイだと見抜くためには、そんなちょっとした動作も？

■■■フィルムの可燃性は？■■■

『映画検定 公式テキストブック』（2006年・キネマ旬報社刊）によれば、「フィルムに映像を記録し、そのフィルムにライトを当てて映像をスクリーンに投影するという今日の映画と同じシステムが完成」したのは1895年（60頁参照）だが、フィルムの欠点は可燃性が高いこと。フィルムの可燃性は、紙の数倍らしい。イタリア、フランス映画の傑作『ニュー・シネマ・パラダイス』（89年）はシチリアの小さな村にある映画館パラダイス座が舞台だったが、その映画館が燃えていく姿はそのことを端的に示したものだ。

映画が始まれば観客はみんな劇場の中に入ってしまうから、出入り口にカギをかけてしまえば、350席の劇場は広大な密室になる。そこで大量のフィルムを燃やして火事にすれば、劇場内の人間は焼け死ぬだけ……。家族全員を殺されたユダヤ人の美少女ミミューとミミューの片腕となっている黒人映写技師のマルセル（ジャッキー・イド）が立案したのはそんな恐ろしい計画だったが、それは可燃性が高いというフィルムの特性を最大限活かしたものだ。さて、そんな用意周到な彼らの計画の首尾は？

■■■真剣な中にもユーモアが■■■

第4章の結末から第5章にかけては『イングリシアス・バスターズ』というタイトルにふさわしく、再度アルド中尉が登場し大きな役割を果たすが、全体的に真剣な人間の営みの中、アルド中尉の雰囲気だけは少しユーモアが漂っている。フィルムの可燃性を利用したミミューとマルセルの計画は完璧のようにみえたが、不思議なのはどうやってすべての

出入り口をロックして劇場内を密室状態にするのかということ。つまり、常識的には本編上映中もホールや廊下には多数の兵士が銃を持って警備しているのでは？ところが第5章を観ていると、そんな兵士がいなかったためマルセルは易々と出入り口をロック。こりゃ少しおかしいのでは？

また第5章では、そんなミミューとマルセルの計画とは全く別に、女優のハマーシュマルクとイタリア人の招待客に化けたアルド中尉らが観客として劇場内に入っていきシーンが登場する。あの当時は現在の空港のようなチェック体制がなかったにせよ、いくら何でも足に爆弾を巻いてチェックを通過するという計画は目茶苦茶では？わざわざ足の中の爆弾を観客に見せてくれるタランティーノ監督の演出はコミカルで、真剣勝負の中にも少しユーモアが。

さあ、そんな二重のワナが仕掛けられた状況下での『国民の誇り』の上映は如何に？

■□あっと驚く結末は？さらなるドンデン返しは？■□

本作では主役のアルド中尉以上に“ユダヤ・ハンター”のランダ大佐の存在感が目立つが、それはハマーシュマルクとアルド中尉のずさんで無謀な劇場侵入計画があっさりランダ大佐によって見抜かれた後、さらに増幅していく。『ワルキューレ』を観れば、ナチス幹部の良識派(?)は早期のドイツ軍の敗北を希望していたことがわかるが、ランダ大佐はヒトラーに心底心酔しているゲッベルスと同じ？それとも？

ハマーシュマルクの右足を自分の膝の上に出させ、その美しい足に片方だけのハイヒールを履かせるシーンは緊張感がいっぱい。もしハイヒールがピッタリ足に合ったら、その後は？こうなれば、いくらアルド中尉がナイフの名手でも逮捕・拘束されてしまうのは当然だ。ところが、既に劇場の中に入っている2人の相棒に対するランダ大佐の処置は？そして拘束したアルド中尉に対してランダ大佐が持ち掛けたあっと驚く提案とは？

第1章から第5章までに分けられた本作は章ごとに集中できるすばらしい構成になっているが、怒濤の展開をみせる第5章はさらに集中力が増していくはず。あっと驚く結末と、さらなるドンデン返しを楽しもう。

2009(平成21)年10月22日記



105

「イングリシアス・バスターズ」

(20日、TOHOシネマズ梅田ほかで公開)

「名誉なき野郎ども」のタイトルに偽りなし!

ヒトラー映画の最高峰はチャプリンの「独裁者」(1940年)。最近の話題作が「ワルキューレ」(2008年)だが、それを超える鎮魂曲大作が登場。邦訳すると「名誉なき野郎ども」と何とも下品な題名は、虐殺した捕虜の頭皮をはぐ残忍なシーンと共に、いかにもタランティーノ監督風だが、15章に分けた構成は緻密で説得力十分だ。

「ドイツ兵を殺す」のが生き甲斐のブラッド・ビット扮する米国兵レイ・中尉をしのぐ存在感を示すが、別名「ユダヤ・ハンター」と呼ばれるナチスのランタ大佐。権力を笠に着た尋問術は陰險だが実に巧妙。裁判員裁判下の弁論術を学ぶには絶好の教材。彼に家族全員を殺されたが、長じて劇場主に納まったユダヤ人美少女ジョシヤナや、英国の二重スパイ

としてヒトラー暗殺に暗躍するドイツ人女優の姿は魅力的。撃ち合いで修羅場と化した居酒屋に片方だけ残されたハイヒールの持ち主は誰? 名作「ニュー・シネマ・パラダイス」(89年)の舞台となった伊シチリア島の映画館パラダイス座が炎上した理由を、キネマ旬報社選定映画検定合格者なら「映画フィルム最大の欠点は強い可燃性」と存じのはず。2

クセントに敏感。スパイを見抜くには頭脳以上に語学の堪能さが肝心と痛感するはず。他方、レイ・中尉の一見コメディータッチな実力行使のやり方は? あつと驚く結末と更なるドンデン返しはきつとあなたの想定外。同監督作品として「キル・ビルVOL.1」(03年)、「キル・ビルVOL.2」(04年)以上の米国での大ヒットも当然だろう。

50人の敵を独りで狙撃した祖国の英雄を主役に作ったプロパガンダ映画「国民の誇り」を、ナチスの宣伝相ゲッベルスは戦意高揚のためジョシヤナの劇場でプレミア上映することに。列席した英雄の皮肉な片思いの結末は? 劇場を閉鎖し、大量のフィルムに火をつけたらそこは確実に地獄絵図。そんな企みが進行中とは知らぬヒトラーの安否は?

語学が苦手な日本人と違い西欧諸国は言葉のア

大阪日新聞 2009(平成21)年11月14日